

氏名	岡 澄子
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第3号
学位授与年月日	平成21年3月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	障害のある子どもをもつ父親の養育参加の経験－生態学的視点からの分析－
論文審査委員	主査 教授 前田 和子 副査 教授 大湾 明美 副査 教授 野口美和子

論文内容の要旨

1. 研究の目的

本研究の目的は、生態学的文脈において、障害のある子どもをもつ父親の養育経験から、養育参加の実態とそれらに関与する要因を検証し、彼らが主体的に養育に参加し、良好な父子関係を形成するための看護援助のあり方を探究することである。

2. 研究の理論的枠組み

父親の養育参加の経験を父親の発達の視点から理解するために、生態学システム論を枠組みとし、質問しならびにインタビュー・ガイドの作成、および分析においてProcess-Person-Context-Time (PPCT)モデル(Bronfenbrenner, 2005)を用いた。

3. 研究方法

研究デザインはミックス法の並行的トライアングレーションデザイン (Creswell, 2007)を用いた。対象は、小児専門病院と総合病院2施設の小児神経外来通院中で、小児期に永続的な運動機能障害を負った者の父親と母親35家族である。質問紙の内容には、父親の養育参加(直接的参加と間接的参加)、PPCT項目(夫婦関係、ソーシャル・サポート、仕事、性役割観、父親の発達の变化など)を含んだ。質問紙を記載後、父親には、父子関係、父親の養育参加の経験に関する半構成的インタビュー、母親には、質問紙の内容を詳細にインタビューした。分析は、差の検定はノンパラメトリック検定、要因分析は重回帰分析を行った。父親のインタビューから逐語録を作成し、文脈に添って文節に区切りコード化し、カテゴリーに分けた。その後、量的データと質的データを統合して分析を行った。

倫理的配慮は、本学の倫理審査にて承認を受けた後、調査先2施設の倫理審査委員会にて承認を得た。

4. 結果

1) 35家族中、母親35名、父親22名から質問紙の回答があり、そのうち、母親33名、

父親 15 名からインタビューの協力を得た。

- 2) 父親が知覚する養育参加：対象の子どもは運動機能障害だけではなく精神発達遅滞を重複し、言語でのコミュニケーションがとり難い子どもたちであったが、直接的参加では子どもを「褒め」、子どもの興味や関心のあることを「知っていた」。間接的参加では、「家計」を担う責任をもち、「母親を支え」、母親と「共同養育」を行っていた。
- 3) 母親からみた父親参加：父親からの「回答あり群」「回答なし群」「母子家庭群」の 3 群間で比較すると、「子どもの世話」以外の項目は「回答あり群」が高く、さらに、「知っている」「ともに過ごす」「妻の相談相手」「家計」の 4 項目と総合得点で、回答あり群が有意に高い得点であった。
- 4) 看護師の共感的な関わりが父子関係の形成を促したケースもあった。
- 5) 父親の養育参加に関連する要因を分析するために重回帰分析を行った結果、父親の養育参加は、「夫婦間のコミュニケーションがよい」、「主観的健康状態がよい」、「仕事の満足感がある」、「子どもの年齢が高い」、「夫婦関係の満足感が低い」の 5 項目の組み合わせと関連していた。しかし、主観的に養育に参加していても、自分ばかり負担が重いと不満を感じている父親、母親にさえも本音を言えず、自分の感情を抑制し、大変さを分かってもらえないと感じている父親もいることが分かった。
- 6) 障害のある子どもの養育に参加する経験は、父親の発達の側面に影響を与えていた。

5. 考察

調査対象のほとんどの子どもは運動機能障害だけではなく精神遅滞を重複し、言語的なコミュニケーションが難しい状況であったにもかかわらず、父親は子どものニーズに添った関わりに努め、主体的に養育に参加していた。しかし、父子関係の形成に困難があり、看護師の共感的な関わりが父子関係の形成を促進したケースもあった。父親が障害のある子どもとの関係に困難を感じている場合、養育に参加していない、あるいは養育に参加しない可能性のある父親を早期に発見し、子どもとのスキンシップなどを通じて父子関係を形成し、主体的に養育に参加していかれるような看護援助を提供していく必要がある。

父親の養育参加は、夫婦間のコミュニケーション、主観的健康状態、仕事の満足感、子どもの年齢、夫婦関係の満足感の 5 項目も組み合わせと関連していた。しかし、父親に負担がかかり、夫婦関係に不満感を募らせることは望ましいとはいえない。父親が主体的に養育に参加するだけではなく、父親と母親が協力し合い養育に関わっていかれるように、父親を含む家族を援助していくことが必要である。さらに、夫婦間だけではなく、父親が話をしたり、情報交換をしたりすることができるようなピアサポートの機会を提供していくことが必要である。

7. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、主体的に養育に参加している父親であった。今後は、養育に参加していない父親、養育に参加しない可能性の高い父親を対象に調査を行っていくこと、さらに今回の対象者を縦断的に追跡調査を行っていくことも必要である。

障害のある子どもを抱えた家族の養育参加は一律なものではなく、健康な子どもの養育

以上に複雑な要因が重なり合っている為、生態学的視点から各家族の状況を評価し、継続的で、個別的な援助を提供していかれるような援助プログラム作成の可能性を探りたい。

論文審査の要旨

本論文は、重度の障害をもつ父親がその子どもたちと良好な父子関係を形成できるような看護支援に資するために、生態学的視点から彼らの養育参加の経験に焦点を当て、その実態を理解し、彼らの養育参加に関与する要因を明らかにしようとするものであり、小児保健看護領域にふさわしく意義のある研究課題である。

論文はまず、丁寧な先行研究の文献検討からはじまり、PARENTING研究について近年急速に増加しつつあるが、障害児をもつ親、特に父親を対象にした研究は国外においてもまだ少なく緒に就いたばかりである現状を明らかにしている。特に生態学的視点からの障害をもつ子どもの父親研究、特に量的研究と質的研究を併用した並行的トライアングレーションの研究デザインを使った研究は、我が国では見あたらず、その点で、独創性のある研究であるといえる。

調査対象は2医療施設の小児神経外来に通院している運動機能障害を有する者の家族であり、協力者は質問紙調査57名（母親35名、父親22名）、インタビュー調査48名（母親33名、父親15名）であった。対象家族の院外における情報の連結不可能匿名化が条件という病院の厳しい倫理審査の壁を乗り越え、多くの研究参加者を得られたことは、筆者のこれまでの臨床経験及び研究活動の実績が認められ理解ある小児神経科医の協力を得られたからであろう。

研究デザインはよく吟味され工夫されている。用いた研究方法は特に次の2点で優れている。①父親の養育参加の実態及び養育参加の要因分析を、夫婦関係も含めてより深く解釈するために、研究参加者として父親だけでなく母親も含めており、ペアとしてそれぞれの回答を比較検討しながら分析している。②並行的に質問紙調査とインタビュー調査を実施する手法は、得られるデータを豊富にし、それぞれの調査結果の限界を補い合い、データをより正確に解釈するのに有益である。

筆者はプロフエンブレナーのPPCTモデルを用いて、質問紙ならびにインタビューガイドを構成し、結果を分析し、父親の養育参加の実態をより詳細に明らかにしている。特に、父親の養育参加への要因を探索した重回帰分析により、父親の回答からは夫婦のコミュニケーション、主観的健康状態、子どもの年齢、仕事の満足度、夫婦関係の満足度の5因子が抽出され、母親の回答からは夫婦のコミュニケーション、父親参加の満足感、夫婦関係の満足度の3因子が抽出され、それぞれの決定係数が.76と.85と高値であった。また、養育参加に関係があるといわれる性役割観について母親はアンドロジー型が37%と最も高かったが、父親は女性性役割型が36%と最多であり、一般集団と比べると母親は違いがなかったが、協力した父親は特徴ある像を示したことなど知見には興味深い発見があり、オリ

ジナリティあるものであった。

修正が必要な点として、得られた豊富なデータを十分に考察できたとまではいえず、研究疑問と仮説にそって考察すること、表題・質的データ表記の統一が必要等いくつかの指摘があった。

日本では今まで取り上げられることのなかった障害児の父親の養育参加の実態と要因の解明は看護実践に活かせることで貢献も大きく、研究としても発展性があり、審査委員会は博士（看護学）の学位に十分相当するとの結論を得た。